



歴史を学ぶということ

静岡大学教授 小和田哲男

歴史を学ぶおもしろさとは

よく、「歴史は鏡である」といういい方を
する。それは、歴史書に『大鏡』『今鏡』『水
鏡』といった書名がつけられていることから
もうかがわれるし、鎌倉幕府が編纂した鎌倉
幕府の歴史書も『吾妻鏡』である。「鏡は、
そこに過去をうつしだし、未来を照らす」と
されているからである。歴史上の人物の成功
例や失敗例を学び、自分たちのこれからの生
活につなげようという考え方で、一種の教訓
史観といつてよい。

たしかに、昔から、「前車の轍をふまず」
とか、「前車の覆るは後車の戒め」などと
いって、先人の失敗を学び、同じような失敗
をくりかえさないという意味で、歴史の学び
方として有効ではある。しかし、歴史を学ぶ
おもしろさはそんなものではない。

何といつても、歴史のおもしろさは、見方
によってちがってくるし、受け取り方によつ
て異なつて見えてくることにある。私がその
ことに気がついたのは、滋賀県のある寺で仏

像を拝観したときのことであった。

本堂に案内され、堂内の電気が全部消され
たあと、住職が懐中電灯で仏像の顔に光を当
てられたのだが、同じ仏像が、光の当て方で
全くちがった顔に見えたのである。その時、
私は思わず驚嘆の声をあげてしまった。実は、
歴史もそれと同じことなのである。特に歴史
上の人物については、光の当て方で、人物評
価が大きく変わることが少なくない。

どうしてもわれわれは、定説とか通説とい
うものにしばられがちである。勸善懲惡とい
う見方で割りきってしまったり、たとえば、
判官最良的な見方をしてしまったりがちで
ある。しかし、悪人とされたり、マイナスイ
メージが強調されたりした歴史上の人物が、
ちがう史料、異なる光の当て方をするこ
とで、別な評価がされることもあるのである。

最近の私自身の経験でいえば、室町幕府八
代將軍足利義政の評価がそれにあたる。多く
の人が義政に対して抱くイメージというもの
は、「政治をほっぽりだし、応仁・文明の乱
を招いたダメ將軍」といったところではない

はないかと思われる。

歴史の学び方はいろいろあるが、私は、や
はり、歴史から自分の生き方をつかむとい
う視点を大事にしたいと考えている。なぜか
といえば、歴史は自然にできるものではなく、
人間によつてつくられるものだからである。
さらには、その人間というのも、ひと握
りの英雄や為政者たちでなく、われわれ一人
ひとりが歴史創造の主体となつてつくつてき
たものだからである。

歴史にロマンを感じるだけでなく、また、
単なる懐古趣味に終わらせないためには、先
人たちの労苦と、それをどうやって乗り越え
てきたかをきちんと学ばなければならぬ。
歴史を正しく学びとり、しかも、それを批判
的に受けとめることによつて、さらには、先
人たちが権力に抗していった闘いの歴史を主
体的に考えることによつて、自分の生き方を
つかむことができるのではなからうか。

社会は変化することを知る

歴史を学ぶとき、一つ注意しておかなけれ
ばならないことがある。それは、いまわれわ
れが知ることのできる歴史は結果だとい
うことである。ふつう、「どうしてそう
なったのか」はあまり考えず、結果を歴史として受け
とめ、それをふりかえる形になる。歴史を学
ぶ本のおもしろさは、結果を追うのではな
く、結果が出る前の段階に思いを致すこと

かと思われる。ところが、苔寺の名で有名な
京都西芳寺に残された「三体詩抄」という史
料によれば、義政は、飢饉が続き、人びとが
飢えているので、庭づくりを行い、その工事
に飢えている人を動員し、飢えから救ったと
いうことが書かれていたのである。これは、
いま風にいえば、公共事業への投資による失
業対策といった趣である。一面的な評価だけ
では正しいとらえ方にならない好例ではな
いと思われる。

歴史から生き方の指針をつかむために

ところで、歴史はどうしても英雄史観に陥
りやすくなる。学校教育の現場でも、古代で
いえば天皇や藤原氏などの公家、中世でい
えば、源頼朝・足利尊氏、そして信長・秀吉・
家康といった武将たちが歴史を動かしてきた
というとらえ方になる。これは、教育現場だ
けでなく、社会へ出て目にする映画・テレビ、
さらには歴史小説などにおいても同じような
傾向であろう。

当然のことながら、「歴史はそうした英雄
たちによつてつくられてきた」と受けとめて
しまう。この点は、戦前、東条英機内閣の外
務大臣で、降伏文書に調印したことで有名な
重光葵が、「日本人は、政治を見ること、恰
も芝居を見るが如く、観賞はしても、自分自
身が役者の一人であり、自ら舞台の上にある
ことを悟っていない」(『重光葵著作集』第一

巻)と嘆いてい

る。多くの日
本人は、重光の
指摘するよう
に、歴史の傍観
者になつてしま
っているのだ
。自分たち一
人ひとりが、実
は歴史を動か
している一人
であることに
気がついてい
ない。
そして、「自
分たちも歴史
を動かしてい
る小
さな歯車の一
つなのだ」と
気がついたら
、歴史はより
身近なもの
になつてくる
のである。そ
れと同時に、
歴史を自分の
生き方の指針
としてとら
えることに
もつながる

たしかに、結果としてはその通りである。
しかし、結果が出る前はどうかだつたのだらう。
実は、信長が宗教勢力を封じこめる以前、わ
が国には武士の支配のおよばない地域が無数
に存在していたのである。加賀国などは「百
姓の持ちたる国」などといわれ、本願寺法王
国をつくりあげていた。信長によつてつぶさ
れなければ、本願寺門徒共和国が各地に
樹立された可能性があつたのである。

歴史は、いくつもある可能性の中から、たつ
た一つが選ばれてつぎの時代に進んでい
った。その可能性がどのようなものであつたか
を考えることは重要だし、同時にそれは、
「世の中は変化していくものだ」という認識
にもつながつてくる。歴史を学ぶことが、い
まのわれわれにどう役立つかといえれば、窮極
的には、「歴史を学び、変革を恐れない魂を
培う」というところに行きつくのではないかと
考えている。

様々な人々が関わり
あいながら、歴史を
動かしてきた



帝国書院
「社会科中学生の歴史
初訂版」